

# 「きのくに学びの教室」における学習ニーズ調査および日本語教師の実践

和歌山県きのくに学びの教室 松下恵子

## 1. 問題意識の変化

報告者担当クラスの受講者が年々減少していることや「きのくに学びの教室」が社会教育や生涯学習の場であることから、コミュニティ学習の場（受講生同士の交流や協働学習）を提供する必要があると考え、当初の課題設定は、現状把握と教科を超えた学習者交流や協働学習の機会提供とした。しかし、調査を進めていくうちに日本語クラスに通う学習者のニーズ調査を丁寧に行うこと、また、担当する日本語教師たちが学習ニーズにどのように対応しているのかを調査する必要があると考えようになった。したがって、課題設定を以下のように変更した。

- ① 「きのくに学びの教室」学習者のニーズ把握
- ② 日本語教師はどのように学習ニーズを捉え、対応しているのか

## 2. 実施計画

### 1) 和歌山県の日本語教育の現状把握（2022年9月～11月）【中間報告済】

「法務省在留外国人統計資」「和歌山県統計調査」「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和3年度）」や地域日本語教育に関する報告書等から和歌山県における日本語教育の状況を把握する。

### 2) きのくに青雲教室における現状把握およびニーズ調査（2022年9月～2023年1月）

教室の参与観察、学習者への聞き取り調査を通して、報告者の担当する「きのくに学びの教室」の現状把握およびニーズを確認する。

### 3) 「きのくに学びの教室」日本語教師への聞き取り調査（2022年9月～2023年1月）

田辺教室、新宮教室の日本語教師に対し、学習ニーズをどのように把握し、学習ニーズに対してどのように対応しているのか、各教室の特徴に合わせてどのような教育実践を行っているのかを確認する。

## 3. 調査結果

### 1) 和歌山県の日本語教育の現状

和歌山県における在住外国人は、県民全体の0.8%である。在住外国人のうち「学びの教室」対象者は、県全体で15%程度、報告者担当エリアにおいては14%程度であり、きのくに学びの教室における対象者の限定が受講生の少ないことに大きく影響していることがわかった。

県内の日本語教室は18教室であり、そのうちの11教室が報告者担当エリア（和歌山市）に集中していることがわかった。地域日本語教室は土曜・日曜を中心に行われており、参加者は技能実習生が多い。国際交流や地域交流を中心としたイベントも多く行われている。

### 2) 「きのくに学びの教室（きのくに青雲教室）」の現状および学習ニーズ

きのくに青雲教室で行われている他教科「基礎国語」「基礎英語」の参与観察を行った。参加者は8名～10程度で、教師を含め全員60代～70代の日本人である。聞き取り調査では、「学び直し／勉強がしたい」「英語が話せるようになりたい」「同年代の仲間や先生と色々話せて楽しい」といったことがモチベーションとなり、熱心に参加していることがわかった。

報告者担当「日本語・生活」は、10代～60代の登録者9名であるが、現在教室に来ているのは4名（10代1名、20代1名、50代2名）である。日本語レベルは、ゼロ初級、初級、上級であるため、初級を報告者が担当、上級を別の講師が担当している。

学習ニーズは、「早く日本語ができるようになってちゃんと仕事がしたい（家族を養いたい）」「公立高校の受験をしたい」「就職活動に向けて敬語・ビジネス日本語を学びたい」「日本語について何でもいから勉強したい」などである。

#### ■日本語クラスへの対応方法

一人一人の日本語レベルやニーズが異なるため、その対応方法として、授業を前半と後半に分け、個別指導の時間とクラス活動（一緒に話してコミュニケーションを取る）に分けるといったことも行ったが、初級と上級などレベル差が大きい場合は行うことができなかった。また、個別指導の場合は、人数が増えると個人個人に対応する時間が限られてしまい十分なサポートができないため、2～3名が限度である。学習進度も個人で異なるため、クラス活動の時間がなくなり、個別指導が中心となってしまう。現在はレベル別で講師を分けることにし、初級レベルは報告者、上級レベルは読み書き担当講師が行っている。

#### ■クラス対応における課題点

これまで報告者は、学習者が減っていることに危機感を感じ、受講生同士の交流や協働学習の必要性を感じていたが、実際はレベル差や学習ニーズの違いへの対応に追われ、結局は個別指導を中心とした授業を行っていた。「毎日来るのが楽しい」と熱心に通っていた学習者が個別指導が多くなるにつれて来なくなってしまったこともある。他教科の授業見学から、受講生同士の交流や協働学習の機会は学習モチベーションに大きく関わることは明らかである。その一方で、半年ほど中断していた学習者が熱心に通い始めるといったこともある。報告者の課題点は、①個別のニーズへの対応方法、②クラス活動の工夫、③「日本語・生活」クラスの目標設定の3つである。

#### 3) 「きのくに学びの教室」日本語教師の取り組み

田辺教室、新宮教室の日本語教師3名を対象に、学習者の学習ニーズの把握や対応方法、クラス活動の工夫等について google forms によるアンケート調査を行った。

#### 【Q1】現在教えている教室の学習者ニーズはどのようなものがありますか？

- ・漢字を覚えたい。友だちに手紙を書けるようになりたい。仕事に活かしたい。書くことが出来ないので書けるようになり、仕事の幅を広げたい。
- ・日々の生活を充実したい、親の威厳を示したい（日本で生まれた子どもに対して）、地域の方との円滑なコミュニケーション

- ・簡単な書類を自分で書くことができるようになるための漢字や語彙力をつけたい、正しい発音で話したい、日本の生活で困っていることやわかりにくいことを教えて欲しい。
- ・休み時間に自国の言葉話すことができるほっとする時間が楽しい

**【Q2】** 個別のニーズに、どのように対応していますか？

- ・何を一番したいか、出来るようになりたいかを聞きそれぞれに、プリントを作成する。出来るだけみんなで一齐に勉強できるようにしている。
- ・進学希望の受講生には個別に対応。資格試験（美容関係）を目指している場合は、過去問題で分からない意味や言葉の使い方など質問してくれるので、それに答えたり、一緒に問題に取り組んだりした。

**【Q3】** クラス活動としてどのような工夫をされていますか？

- ・教える側と学習者との一対一にならないように、学習者同士でわかりにくい言葉等を教えあいをしたり、学習者から出る答えや質問を広げて授業を進めたりして、できるだけ楽しい授業ができるようにと考えている。
- ・できるだけ個々の進度に合わせて、同じ教材を使ってもひらがな・カタカナで書いてもらったり漢字を使ったりしている。1つの教材だけでなく、生活に即した言葉遊びや、新聞雑誌、スーパーのチラシ等を活用している。
- ・例えば、授業に入る前に、どのように正月を過ごしたかなど、身近な生活での出来事を話してもらい、お互いが理解できるようにし、話したり、質問したりし易い環境を作るようにしている。

#### ■個別ニーズの把握について

生活や仕事のためが多いが、親の威厳を示す、地域の方とのコミュニケーション、自国の言葉話すといった、他者とのコミュニケーションのためといった学習ニーズもある。生活や仕事、他者とのコミュニケーションは、クラス活動で対応し、受験や資格試験には個別に対応している。

#### ■クラス活動の工夫について

学習者同士の協働学習、同じ教材を使って個別の能力に合わせた使い方をする、ニーズに合うような教材の工夫、学習者とコミュニケーションの時間を多く取るといった工夫をしている。

### 5. 所感と今後に向けて

今回の調査を通して、学習者のニーズ把握を把握し、どのように対応していくかといった課題に対して、他の先生方の事例を確認した。個別のニーズはあっても他者との交流や協働学習をベースに授業を展開していくことが重要であることがわかった。引き続き「学びの教室」に関する調査活動を続けながら、本教室の特徴を活かした実践を行っていききたい。

# 「きのくに学びの教室」における 学習ニーズ調査および日本語教師の実践

和歌山県きのくに学びの教室 松下恵子（西16）

実践を通して「行ったこと」「考えたこと」の変遷

「社会教育」としての日本語教室の役割  
科目を越えた協働学習(学習者同士の交流)



「まなびの教室」日本語教室の役割  
学習者ニーズ／各教室の特徴の把握  
日本語教師の実践

課題解決に向けた実践を通じて、  
日本語教師（地域日本語コーディネーター）として果たした役割

---

「学びの教室」における学習ニーズの把握

---

他の日本語教師へのリソース

---

教育委員会との連携（高校受験）

自身大切にしたい視点

社会教育/生涯学習としての日本語教育

学習者の学びたいことを学ぶ

学習者同士の交流の場、居場所づくり

人的リソースという立場

実践において、  
難しいと感じたこと、  
今後に向け知りたいこと

- 社会教育/生涯学習としての日本語教育
- 学習者同士の交流の場、居場所づくり
- 人的リソースという立場